

当事者研究を神経現象学に接合する

石原孝二 (Kohji Ishihara)
東京大学・大学院総合文化研究科

神経現象学(Neurophenomenology)はヴァレラによって提唱されたアプローチであり、一般に①体験の現象学的な分析、②力学系理論、③生物学的システムに関する実験の統合に特徴があるとされる (Gallagher and Zahavi 2008; Thompson 2007)。ここではヴァレラの最初の論文(Varela 1996)に即して考えていくことにしよう。ヴァレラによれば、神経現象学とは、意識に関する認知科学的な研究と意識体験の現象学的な記述の融合を目指すものである。ヴァレラはまた、意識体験を記述するためには、厳密な方法としての現象学的還元を習熟することが必要であり、現象学的方法が受け入れられるような仕方で(意識に関する)研究共同体が拡張されるべきであると主張する。

こうした現象学的方法は、研究者(実験者)の側だけでなく、被験者の側においても導入することが考えられる。実際に被験者に対する現象学的な訓練が試みられたものとして、ルッツら(Lutz et al. 2002)の研究がある。なお、自然科学(神経科学)と現象学の融合を目指すという意味においては、神経現象学は「現象学の自然化」の試みの一つであるとも言える。現象学の自然化のもう一つの試みとして、現象学的な洞察を実験デザインのなかに投入する「前倒しされた現象学」と呼ばれるものがある。例えば、ギャラガーによる「行為者性の感覚」(sense of agency)と「所有の感覚」(sense of ownership)の区別の明確化は神経科学・認知科学の実験デザインに影響を与えてきた (Gallagher and Zahavi 2008)。

他方、「当事者研究」とは、2001年に北海道浦河町の浦河べてるの家で始まった活動であり、精神障害をもった当事者たちが自身の問題について「自分自身で、共に」研究するものである。べてるの家の当事者研究は直接的には認知行動療法やSST、当事者運動から強い影響を受けているが、べてるの家の設立(1984年)と発展に深く関与した向谷地生良を介して、フランクルの実存分析や現象学もその思想的な背景をなすものとなっている。とくに、「自分自身で、共に」という当事者研究の理念は([谷 2002]で引用されていた)フッサールの言葉からきているものである(石原 2013a; 2013b)。当事者研究は当初精神障害をもつ当事者の間で始まったものだが、その後発達障害をもつ当事者や依存症の当事者の間にも広まっている(綾屋、熊谷 2008; 上岡・大嶋 2010)。

神経現象学や「現象学の前倒し」などの現象学の自然化の試みは、フッサールや他の現象学者たちが発展させてきた方法や洞察を実験者もしくは被験者に習得してもらうことを基本にしている。現象学者が得ようとする洞察は、「不変項」、つまり、体験の普遍的な特徴や構造を示すものである。個人的な特性やそのときどきの条件によって左右されるものであっては、実験デザインの中に入れ込むこ

とは困難であろう。実際、ヴァレラは現象学的還元（獲得されるべき）一つの重要な側面として、「安定性」を挙げている。現象学的還元はそもそも「不安定」であるがゆえに、継続的な訓練が必要なのである(Varela 1996)。

しかし、精神障害や発達障害をもつ人々の体験を問題にしようとするとき、このような「安定性」を求めることに意味があるだろうか。例えば、精神障害をもつ人を訓練して、その体験を安定的に記述できるようにすることが行われるべきだとは思えない。他方、精神科医や研究者を訓練して精神障害をもつ人の症状を安定的に把握できるようにすることは意味をなすように見える。しかしそれはあくまでも「症状」の把握であり、神経現象学が重視する「訓練された一人称的説明」とは言えないものなのではないだろうか。精神障害をもつ人の体験に関するこうした問題は、神経現象学に特有の問題というよりは、現象学一般および現象学的精神病理学においても生じる問題である。

当事者研究を神経現象学や「現象学の自然化」に繋げようとするならば、神経現象学や現象学の前提に修正を加える必要があるだろう。個々人やその時々条件に左右されない体験の普遍的な構造や特徴をとりだすのではなく、個々人やその時々条件において変異していく体験をうまく捉える方法を編み出す必要があるし、また、安定性を保つことが困難な人々に負担なく研究に参加してもらえる方法を考えていく必要がある。またそのような方法の検討は、(本ワークショップ提題者の熊谷の研究プロジェクトが実際に示しているように) 障害をもつ当事者の研究への重層的な参加を促すことになるだろう。単なる被験者として研究に参加するのではなく、実験デザインの考案や実験結果・実験プロセスの検証など、研究の様々な局面において当事者が参加する仕組みを考えていく必要がある。

そのような修正を加えてもなお、神経現象学に当事者研究を接合する意味はあるだろう。当事者研究においては、同じような悩みを抱えた当事者たちが、語りを通して、何らかの普遍性を抽出していくというプロセスがある。それはヴァレラらのイメージとは大きく異なるものの、やはり「不変項」を求めるプロセスであろう。また、当事者研究は一種の態度変更を必要とするものである。そのような当事者研究から得られた成果を神経科学や精神医学にどのように生かしていくのか、また、当事者研究のプロセスと神経科学・精神医学のプロセスをどのように融合していくのかを検討することによって、ヴァレラらの神経現象学が提起した問題を新たな視点から捉え直すことができるだろう。そしてまた、そのような作業は当事者研究を「現象学的実践」(石原 2013b)として捉え返す作業にも密接に関連することになるものと思われる。